

塩沢忠和前理事長を悼む

静岡県労働研究所 理事長 萩原繁之

当研究所の前理事長、塩沢忠和弁護士が10月16日に逝去された。

この原稿として、パレスチナ、イスラエル問題の論考を、とも考えていたところだが、それに替えて同弁護士の追悼文とすることをお許しください。

塩沢忠和さんは、若い出征兵士とورا若き乙女との愛の結晶として生まれた、とご本人から承ったことがある。もちろん未婚だったお二人が、別れの名残りに愛情を交わした結果としてお生まれになったのがご自身だそうだ。ご母堂様のお身内は必死になって赤ちゃんの父の素性を問いただし、その後、幸いにして生還された御尊父様とご母堂様とはめでたくご夫婦となられたのだそうだ。

そんな情熱的なエピソードを出自として持つご自身も、情熱と、そして理性とを併せ持ち、労働者の権利とそのための理論、理念と、民主主義と平和のために、79年間、疾走された。

焼津市で育ち、県立静岡高校を経て東北大学法学部に進学。労働者の味方として活動する弁護士をカッコ良いと思われて志され、志通りに労働者の味方として活躍する弁護士になられた。1974年から1988年まで秋田市で活動された後、1988年に、一念発起して、静岡県に戻られた。

県内のどの地域で活動するかについては、白井孝一弁護士に相談されて、浜松を勧められたと聞く。浜松の皆さんにとっては、白井弁護士が塩沢弁護士と並ぶ恩人かもしれない。実は、この同じ1988年に、私自身、新人の弁護士として静岡県で活動を開始した。同じ県内で同じ時期から活動を開始したとは言え、県東部と県西部は県内の方はご存知のとお

り、離れているのだが、それでも私は、何かと塩沢弁護士にお世話になった。パワーと情熱だけでなく、精緻な思考と理論に裏打ちされたご意見には感動すら覚えた。

ある時は、私どもの仕事に関わる相談事があり、わざわざ浜松から沼津にお出でいただいて相談に乗っていただいて帰宅したら同時多発テロが起きていたことを知った、ということもあった。

塩沢弁護士は、この静岡県労働研究所でも、大橋昭夫弁護士に続く第2代理事長として活躍された。

こんなエピソードもある。研究所として訪韓調査団を結成して韓国に行く際、旅行社は静岡空港を出発の空港としていた。塩沢弁護士は、静岡空港開設に反対する運動をしてきた立場上、静岡空港は利用できない、と筋を通して、敢えて中部国際空港を選んだ。私も従いたいのはやまやまだったが、沼津から中部国際空港は遠すぎる。やむなく静岡空港から出発することにしていたら、悪天候のため、飛行機は何時間も離陸できなかった。静岡空港の欠陥空港ぶりを体感した。因みについ最近の豪雨でも、静岡空港は、北海道から来静した学者の先生を着陸後何時間も飛行機に閉じ込め、ようやくおりたら動いている交通機関がなくて静岡市まで何時間もおいでになれなかった、ということもあった。

それはともかく、筋を通すという点でも筋金入りの先生だった。

塩沢弁護士を失ったのは、とても大きな損失だが、後を継ぐ頼もしい人々が、いる。こうした人々と力を合わせて同弁護士の目指した道を歩み継いでいきたい。